

第21回

健康開
ノンフィクション賞
受賞作

モスクワ市ビヤートニツカヤ通りにあったモスクワ放送。その6階に「日本課」はあった。東西冷戦下、日本語放送が発信されており、現場では、少なくない数の日本人が業務を担っていた。彼らはどんな人物だったのか。志したのは真実を伝える「報道」だったのか、「プロパガンダ」（政治的宣伝）だったのか。両国に「MOCT（架け橋）」を築くことだったのか……。



MOCTとは、ロシア語で「橋」「架け橋」のこと。ソ連と日本、二つの国のはざまで「ラジオ」を通じて夢を実現しようとした人々に光を当てる渾身作。

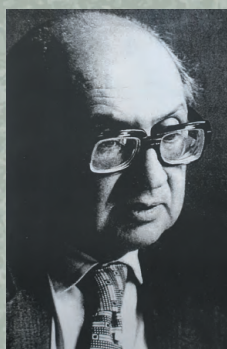
11月24日発売

MOCT

「ソ連」を伝えたモスクワ放送の日本人

あお しま けん
青島 顕

本書「モスクワ放送を支えた人々」より一部抜粋



モスクワ放送日本課の名物課長、リップマン・レービンさん＝「今日のソ連邦」1982年5月1日号より



1990年1月、モスクワで撮影した歌手・川村かおりさん一家。左から母のエレーナさん、弟の忠さん、かおりさん、父の秀さん＝秀さん提供



ハバロフスク支局に勤めた中川公夫さん＝1975年11月、同僚の有江逸郎さん撮影。中川妙子さん提供



モスクワ放送局舎の玄関に立つ西野肇アナウンサー＝西野さん提供

選考委員、
大絶賛！

(選評より・五十音順)

書き手の静かな理性の^{りよりよく}贅力に触れた読み手の心は、
快い驚きに満たされずにはいられない。

——加藤陽子(東京大学教授・歴史学者)

ソ連(ロシア)の国策メディアであるモスクワ放送にかかわった日本人たちの
有為転変を丹念に浮き彫りにしていて、最も好感が持てた。 ——姜尚中(政治学者)

反ロシア一辺倒の時代だからこそ、争いから独立した市民レベルの
「MOCT(架け橋)」を考える本作。未来へと続く橋となった。 ——藤沢 周(作家)

どんな厳しい制約がある時代にも架け橋になろうともがく人たちがいる。
青島記者もそのひとりかもしれない。 ——堀川恵子(ノンフィクション作家)

東側ではご法度のビートルズを流した元民放アルバイトの男。
戦時中、雪の樺太国境を恋人と越境した名女優。
シベリア抑留を経て、迷いに迷って残留した元日本軍兵士。
ソ連亡命後に帰国。ロシア語学校を開設した謎のロシア語使い…。

試練や制約に立ち向かった日本人を描き、
ソ連の国営放送の実像に迫るノンフィクション！

著者プロフィール



あおしま・けん●1966年静岡市生まれ。
小学生時代に東京都へ。91年に早稲
田大学法学部を卒業し、毎日新聞社に
入社。西部本社整理部、佐賀、福岡、
八王子、東京社会部、水戸、内部監査
室委員、社会部編集委員、立川などで
の勤務を経て、現在東京社会部記者。
共著書に『徹底検証 安倍政治』『記
者のための裁判記録閲覧ハンドブック』。
本書が初の単著となる。

目次より

モスクワ放送を支えた人々

第1章 「つまらない放送」への挑戦

第2章 30年の夢探しの旅

第3章 偽名と亡命と

第4章 「日本人」のままで

第5章 迷いの中を

第6章 望郷と、ねがいと

第7章 伝説の学校「M」

第8章 その後の2人

番外 ラジオが孤独から救ってくれた

モスクワ放送日本語放送の歴史

「1983年4月の番組表」

〈プロローグ〉より

かつてソ連と呼ばれた国から日本語のラジオ放送が流れていた。受信機のダイヤルを合わせると、雑音混じりに少しきめしい声が聞こえてきたものだ。

「こちらはモスクワ放送局です」

それは1983年9月、改革開放政策として知られるペレストロイカが始まる少し前のことである。ブレジネフの次のアンドロポフ書記長の時代だった。サハリン沖のソ連領空で、ニューヨーク発アンカレッジ経由ソウル行きの大韓航空007便ボーイング747型旅客機がソ連軍のスポイ115戦闘機にミサイルで撃ち落とされ、日本人を含む乗客と乗員269人全員が死亡する大惨事が起きた。

「なぜ人間はこんな愚かなことをするのでしょうか」

東京都内に暮らす高校生だった私は、学校のラグビー部顧問だった熱血漢の青年英語教師がそう嘆いていたのを覚えている。

しばらくたったところ、夜、家に帰って何気なくラジオをつけてダイヤルを回すと、ニッポン放送の周波数(1242キロヘルツ)の近くから、以下のような日本語が聞こえてきた。

「……わが国の……南朝鮮の飛行機の飛行を妨害した問題で……」

モスクワ放送のニュースの時間のようだった。「ソ連国家ラジオ・テレビ委員会」が日本向けに社会主義陣営の盟主としての立場を伝えるために放送しているラジオ局だったが、当時の私にはそんな知識はなかった。電波状況があまりよくなくて、きちんと聞き取れなかったが、断片的にこんな言い回しの言葉だったと記憶している。

この事件に関して日本国内では当初は情報が錯綜していたけれど、ソ連軍機による撃墜だということは確定的に伝えられるようになっていた。日本の自衛隊がロシア語の撃墜命令の音声を受信し、それを米国が国連で暴露していた。

ところが、モスクワ放送の言っていることは、まるで違っていた。撃墜の事実を「妨害」とあいまいに表現し、相手の飛行機が領空侵犯をしたのがいけないのだと主張していた。韓国のことを指すらしい「南朝鮮」という言葉も耳慣れなかった。日本人犠牲者は28人にのぼっていた。それらを伝える年配の男性アナウンサーの日本語には、発音やイントネーションで不自然なところはなかった。感情の読み取れない、淡々とした言い方だった。

(続きは本書でお楽しみください)